

● ジョナサン・ベネディクトのワンポイントアドバイス

子どもの個性を大切に



長女が7歳の時、ピアノのレッスンを受けさせることにしました。当時、どこの家でも娘にはそのようにしており、わが家でもそれがお金と時間の賢い使い方だろうと思いました。

ところが、2年間通い続けたにもかかわらず、何一つ身につかず、親がイライラするだけで何も良いことはありませんでした。

振り返って、今では娘はピアノに向いていなかったのだと私たちは納得しています。どうして娘にはできると思ったのか、自分でも分かりません。とにかく指をそれぞれ思うように動かすことができないのです。

問題は、私たち親が娘の個性に気づかず、ただただ他の家族のまねをしようとしていたことです。もしかししたら、私たちと同じような経験をして、お金と時間の無駄づかいではないかと感じている親御さんがおられるかもしれませ

ん。それから15年たって、10人の子持ちになった今は、子どもとは性格も能力も文字通り十人十色なのだということが良く分かります。多少賢くなつて、親の期待を押しつけるより、それぞれの個性を見つめるよう努めています。そして、どの子にも神が与えたユニークな能力があることを発見しました。

ただし、それが一日や二日で分かるわけではありません。

将来何をしたいかを知ることが簡単な子もいますが、そう簡単には分からない子もいます。その場合は、じっくりと時間を取って話を聞いてあげる必要が出てきます。何年かかるかもしれません。ところが、最近は生活があわただしくなつて、いっしょに食事をしながら会話を楽しめる家庭が少なくなりました。

共働きですと、わが子の興味や能力を知らずにすんでしまうことも珍しくはありません。あつと言う間に成長し、大学に行つていても、まだその子が将来何をしたいのか分からない、ということもあります。

子どもの個性を知るために、わが家では子どもたちの得意なことをほめ、家の中でそれを生かせるような仕事をまかせています。たとえば、私たちが発見した子どもたちの能力は、物語や詩を書く、歴史を学ぶ、裁縫をする、ガーデニングを楽しむ、コンピュータグラフィックスをする、動物の世界をすることなどです。

子どもが十代になつたら、しなければならぬ勉強とは別に、彼らが自由時間に喜んでやっていたことは何かを知るように努め、それをさらに追求するように私たち

は励ましています。思春期になると、自分の能力を見つめることは自信につながるし、時間を持て余して悪さをしてしまう危険からも守ってくれると言われます。

お宅には、将来が見えず、悪い影響を受けそうな友だちとばかりいっしょにいたがる十代のお子さんはいませんか。今は、あなたが彼(彼女)の得意なものを見つけて出し、それを伸ばすために時間とお金を使う時なのかもしれません。それによつてあなたもお子さんも多くの心痛を避けることができます、将来が開けてくるかもしれません。



子に押しつけるまでは行かなくても、期待はしていました。しかし途中で、息子には違う道があることに気づきました。そして、プレッシャーをかけるのではなく、子どもの将来を神にゆだねることにしました。子どもというものは、常に両親からの支えと祝福を求めています。それを与えることを怠ると子どもに混乱を招きます。

子どもがなかなか自分の特技を見つけて出せない原因が、親にあることもあります。たとえば、牧師である父親が自分の息子にも牧師になつてほしいと願い、そのように期待をかけて勧めたりします。しかし、もし息子自身はビジネスマンになりたいと思つていて、親からは認められず励ましの言葉もないとしたら、混乱して自分はどうすればいいのか分からないまま進路がなかなか決まりません。私も実は、似たようなことをしました。自分の宣教師の職業を息

子に押しつけるまでは行かなくても、期待はしていました。しかし途中で、息子には違う道があることに気づきました。そして、プレッシャーをかけるのではなく、子どもの将来を神にゆだねることにしました。子どもというものは、常に両親からの支えと祝福を求めています。それを与えることを怠ると子どもに混乱を招きます。ところで、ピアノが全然だめだった娘は、結局、詩や短編小説に大変関心があることが分かり、自分でも書くようになりました。今では大学院で創作のコースを取りつつ表現力を磨いています。いざれその才能が神様に用いられることを、私たちは期待し祈っています。

文＝ジョナサン・ベネディクト

1956年山口県岩国市生まれ。宣教師2世。4男6女がいる。長野県在住。清泉女学院大学講師。著書「ふたりのために」

